

家族を介護すること

父は脳梗塞で寝たきりになり、話すこともできなくなりました。父の介護をやつてきて、介護というものは、相手の気持ちをくみ取り、お互いが信用しあわないうまくいかないことが分かりました。例えば、オムツを替えるときでも呼吸が合わないときでも呼吸が合う：つまり、少しでも気持ちを理解しあえれば、何でも円滑に進めることができるのです。

オムツを替えることも、汚いとも辛いとも思いません。嫌々すると、その気持ちが父に伝つてしまいますからね。やはり、「相手のために何をしたら良いか」を知ることが重要だと思っています。

たった一言で変わるんです

認知症の人は、ちょっとした家族の人が目を離してしまうと、居なくなる場合があります。そんな時に、地域の人が声掛けをしてくれることが非常に助かるんです。私には、障害を持つ娘がいるんですが、娘が電車に乗ったとき、一人で間違つて玉名駅まで行つてしまったことがありました。しかし、電車に乗り合わせた人が声を掛けてくれたので、無事に帰宅できたことがあつたんです。そのちよつとした「一言の声かけ」が人の命にまで影響することもあるんです。だから、地域の人が声を掛け合うような町に

大津町長に聴く

「人と自然にやさしい心かよいあうまち」を目指して



なつて欲しいと思っています。
やさしさがあふれるまち

私は、人間は自然の中でいろんなものに助けられて生かされていると思つています。だから、人間も助け合わないといけないと思ふんです。

「鳥や花を美しいと思う気持ち」や「ものを大切にする思い」などの思いやりがあれば、家族や周りの人たちにもやさしくできると思ふます。それが「人と自然にやさしい 心かよいあうまち」なのだと思います。

セカンドライフ

定年を迎えて第2の人生を歩む人たちは、目的を持つて楽しんでできることをやるのが良いのではないのでしょうか。それが、認知症の予防につながると思ふますし、その人たちの経験や知識を、認知症サポーターとして、地域に生かして欲しいですね。

私も「オレンジ・リング」を持つ認知症サポーターとしてこれまで以上に地域での見守りの目となつていきます。町としては、サポーター講習会を積極的に実施し、家族みんながサポーターになることを目指したいと思ふます。そして、地域包括支援センターがもっともつと皆さんに活用してもらへるようになって欲しいですね。

オレンジ・リングに託す思い

認知症は、以前「痴呆」と呼ばれていました。厚生労働省は、平成16年に「痴呆」に替わる用語に関する検討会を立ち上げ「認知症」と改めました。この用語変更は、症状、原因の実態を把握しやすくし、早期発見、早期治療を妨げないようにするためでもありました。

認知症は、近年増加してきた病気ではありません。昔からある病気です。しかし、認知症についての正しい知識はあまり知れ渡つてはいなかったと思ふます。しかし、知識があれば変わります。認知症の人にやさしく接することができますし、予防という観点から、未来の自分のためにもなります。

その悲しみも知る

少し考えてみてください。もし自分の記憶が、昨日の1日分だけ無くなつていたとしたら：昨日の起こつたことを、周りのみんなは覚えていたら…。多く

その手はきつと暖かい

知つて、聴いて、力になる。力になったときのあなたの手には、きつとオレンジ色のリングがあることでしょう。その手を、大切な人に差し伸べてあげてください。手を通じてあなたの暖かさがきつと伝わることでしよう。昨日と明日の間：すなわち「今日」を生きていくのは、大切な人である「あなた」と「わたし」なのですから。

どんなことがあつても、その人の、人としての重さは変わらない

昨日と明日の間

の人が「俺が（私が）、昨日のことを忘れてはすなにかない！」と思つてしまうことでしょう。忘れていたことを知つたなら、その絶望感や悲しみは筆舌に尽くし難いものがあります。認知症になつた人は、その悲しみを抱えているのです。

【参考】認知症を学び地域で支えよう／地域で認知症の方々を支える認知症サポーター100万人キャラバンホームページ